



一日目追加 HOマリー







朝日とともに目が覚めた。

ぼんやりとする頭で、見慣れない景色を見つめる。

――そうだ、今は小屋にいるんだった。

生まれてからずっと教会で過ごしていたから、山道を歩いたことで相当疲れていたようだ。

持ってきた寝衣に着替えることなく横になってしまった。 ワンピースも、侍女に結ってもらった髪もぐちゃぐちゃだ。 侍女や先生にこんな姿を見られたら怒られてしまう。 けれども、今、私を叱る人はここにいない。

この小屋は、何人もの子どもが魔法を授かるために過ごした場所だ。

肩の痣は魔力の源。

儀式でそれを解放し体内に巡らせることで、魔女になる。 そのためには、あらかじめ魔力を体になじませる必要が あった。

この小屋の周りにはたくさんの魔力が漂っていて、ここで過ごせばそれが叶うのだという。

今までたくさんの人に囲まれて過ごしてきたから、部屋に 小鳥の声が響くほどの静寂が少し寂しい。 けれども、この小屋にいるのは私だけじゃない。

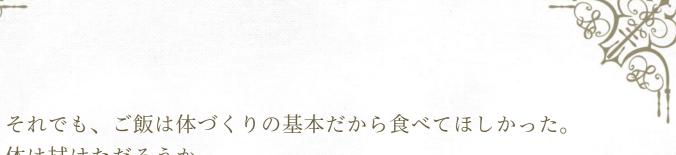
りれとも、この小室にいるのは私だりしゃない。

彼――スミレはもう、起きているだろうか。

ご飯は食べただろうか。

料理の知識はあるけれど、作るのははじめてだった。切った野菜は不揃いで、味だって保証できない。





体は拭けただろうか。

けがをしている箇所を清潔にしてもらわなければならない。 あとの処置は実際にけがの具合を見なければわからないか ら、私にできることはこのぐらいだった。

こうして誰かのことを心配するのははじめてで、不謹慎だ けれど、なんだか新鮮だ。

魔女になれば、こうやって人助けをすることになるのだろ うか。

しかし、誰もいないはずの小屋に人がいるとは思いもしな かった。

昨日、とっさに『ここに住んでいる』と答えてしまったけ れど、もしも詳しいことを聞かれたらどうしよう。

魔法を扱う者はおそれられる存在だ。

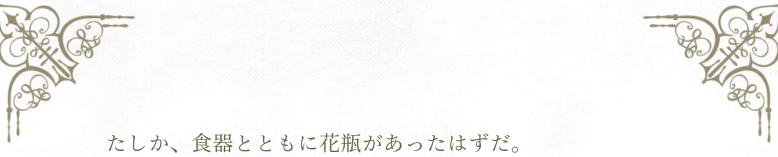
それに関連する話をするのはやめたほうがいいだろう。

私はまだ魔女ではないけど、けがをしている人を怯えさせ るわけにはいかない。

とにかく、なにかを尋ねられたら『ここは家の所有する建 物で管理のために住みはじめた』というウソで乗り切ろう。 この小屋が教会の管理下にあるのは間違いないし、うん、 我ながらいい案だ。

下へおり、井戸で汲んだ水を鍋に入れ、火にかけた。 沸くのを待っている間に外へ出て少しだけ歩くと、小屋の 裏に小さな花が咲いていた。





たしか、食器とともに花瓶があったはずだ。 それを丁寧に摘んで、小屋へ戻った。

花瓶に花を飾り終えたあと、お湯で体を拭いた。

ぐちゃぐちゃの髪も解いてから洗い、いつもは侍女が結ってくれていた髪を自分で結ぶ。

簡単なふたつ結びしかできないけれど結ばないよりはいいだろう。

最後に服のしわを伸ばした。

今日は山の麓にある町へ買い物に行かなければ。 一人分の食料しか持ってきていないし、スミレが欲しいも のや必要なものもあるかもしれない。 声をかけ、尋ねてみよう。

準備ができたので、彼のいる部屋の前に立つ。 昨晩置いたお湯もトレーもなくなっていて、ひとまず安堵 した。

私はノックをするために、手を挙げた。



